
バカとテストと欠陥製品

--

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと欠陥製品

【Nコード】

N5558Q

【作者名】

一一

【あらすじ】

四月、人に優しく自分に厳しい、他人を思いやることのできるまさしく人間の鑑のような男、つまり、このぼくは、文月学園という試験校に転入することになった。

そこでぼくは、これまでの厄介事続きの日々とは打って変わった、平和な学園生活というものを送ってみるつもりであった。

しかし、そこはやはりと言うべきか、そこで出逢ったのは癖のある人ばかりで……。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

いちひと
——と読みます。

これが初めての投稿となる初心者です。

読みづらいところも多いと思いますが、楽しんで頂ければ幸いです。

この小説は、原作（特に戯言シリーズ）を知らないと厳しいものがあると思います。
注意してください。

ブローグ

文月学園。

科学とオカルトと偶然により完成されたと言われる「試験召喚システム」を試験的に導入した実験校。

進級試験の点数によって厳しくクラス分けされる。

それが、今現在、冴えない一介の戯言遣いに過ぎないぼくのいる場所の簡潔な情報だ。

とはいっても、ぼくのあまりにもお粗末な記憶力が遂に一念発起してことによつてようやくまともな機能を得たのかというところんそんなことはなく、21Fと書かれたプレートのあると教室の前で立った状態、さらに詳しく言うならば、その教室の中にいる教師に呼ばれるのを待った状態で、文月学園の入学パンフレットを広げて読んでいるだけである。

カンニング、とも言っけど。

さて、多少変わったシステムを導入しているといえ、ただの試験校でしかないこの学園に、何故ぼくがいるのだろうか。

答えは簡単で、他ならぬ玖渚のやつ頼みだ。

まあ、当然といえば当然だが、この学園のスポンサーには玖渚機関がいる。その玖渚機関がこの学園の取り組みの成果を調査しようとしていたのを、あいつは目ざとく知っていたようで、代わりに調査すると言って引き受けたらしい。力づくで奪い取った、というのが正しいのかも知れないけど。

しかし、真に重要なのはそんなことではない。真に重要なのは玖渚の頼みにいかに応えてやるかということであり、そこを間違えてしまうようでは本末転倒もいいところだ。

けれど、情けない記憶力を誇るぼくのことだ、こまめに確認しな

ければふとした拍子に忘れてしまいかもしれない。だったら、ここらで一度、確認なりなんなりをしておいた方がいいだろう。丁度、なにもすることがなくて突っ立っているのだし。

と、そのとき

「みきわめ汀目君、入ってきてください」

と、声が聞こえてきた。しかし、ぼくの知り合いにそんな名前の人はいない。無論、ぼくだって違う。ならば誰か知らない人に声をかけたのだろう。気にする必要はない。

さて、少し邪魔が入ったが気を取り直して頼みごとの確認をしよう。

玖渚の頼みは主に2つ。

1つは、さつきも言った、この学園の取り組みの効果や成果の調査。けれど、こっちは適当にやればいいとのことだ。調査の仕事を横取りしておいて、それはどうかと思わなくもないが、ぼくの仕事が少しでも楽になるのだから、それはそれでいいと思う。

そしてもう1つ。ここ、文月学園の制服を手に入れてこい、というものだ。しかも、男女両方のものが欲しいらしい。

玖渚なら、別にこんな手間のかかることをしなくても簡単に手に入れられると思うが、何故かは知らないけどぼくに手に入れさせたいみたいだ。まあ、どうせいつもの悪ふざけだろう。

それに、男物の制服ならぼくのを渡せばいいから、実質的には女物の制服だけでもいいことになる。

今回は、特に事件のようなものも起きないと思うし、結構楽な仕事になる気がする。というかそうであって欲しい。

さて、一通りの確認も終わったし、どうしていいようか。

なんて考えていると、突然教室のドアが開いて

「汀目君！ 聞こえてないんですか！？」

なんてことを言いながら教師らしき人物が出てきた。

当然のことながら、今この教室の前で立っているような人物は、

ぼくを除いては一人もいない。つまり、さつきからこの人はぼくに声をかけているのだろう。

「すいません。ちょっとぼうつとしてました」

とりあえず、当たり障りない返事をしておいた。

「そうですか。これからは気をつけてください」

「はあ」

「それじゃあ、早く中に入って自己紹介をしてください。後、一応言いますが、チヨークは有りませんよ」

それは一体どういう意味なんだろうか。文字通りの意味で、今現在この教室にはチヨークがないということなのか、それとも、黒板に名前を書かせないでおこう、または、書く必要はないということを間接的に言ったかったのか。

しかし、そのどちらでもぼくには関係ないことだ。元々、名前を黒板に書いたりする気なんてないのだから。

それじゃあ、教室に入ることにしようか。

戯言遣いがおよそ十年ぶりとなる普通の学校生活を始める瞬間だった。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？

作中で、いーちゃんが汀目と呼ばれていたのは、舞台が学園であるため名前がないと不都合な点が多く、なにかしらの名前が必要となつたからです。

また、名前については、作者の方で適当な偽名を考えても良かったのですが、じっくりくるものが浮かばなかったため、鏡の向こう側のものを使わせてもらうことにしました。

次回がいつになるかは分かりませんが、縁があつたまた会いましょう。

第一話

自己紹介。

読んで字の如く自身を他人へと紹介する行為であり、初対面の人とのコミュニケーションの第一歩だ。

そしてその際に重要となってくるのが、相手に少しでも自分のことを知ってもらいたいという気持ちである。

などと、一般論的なことを考えていた思考を中止する。

何故なら、今すべきなのは現実逃避じみた思考ではなく、その思考のテーマでもあった自己紹介を迅速に終了させることだからだ。

無論、まだ始まってすらいないけど。

つまり、今現在のぼくは他人からすれば、教卓に立ったままなにをするわけでもなくただ黙っているだけの転入生ということになるのか。

ぼくとしては初っ端からそんな黙^{だんまり}りを決め込むような奴とは関わり合いになりたくないな、なんて思ってしまう。

その関わり合いになりたくない奴はぼく自身だったけど。

しかし、仮にも自己紹介と言っているのだから、いつまでもこのままという訳にはいかないだろうと思う。ただ、思ったことを行動に移すことができるかという点、それは全くの別問題だ。

けれども、物事というものは大抵に場合は意志とは無関係に進む。この場合もそうだ。

思っただけで行動には移そうとしないぼくにいい加減じれたのか、先生が声をかけてきた。

「汀目君？ どうかしたんですか？」

「どうもいませんよ」

「そうですか。それなら早く自己紹介を済ませて貰えませんか？」
「わかりました」

さて、ここまで言われてしまったら仕方ない。腹を括くくつてさっさと終わらせるとしよう。

「はじめまして。今日からこの学園に通うことになった

」

……………困った。

自己紹介において、自分の名前を言うというのはいわゆる鉄則である。

ちなみに、今回は澄百合のときとは違い、潜入ではなく転入だ。必然、決して少なくはない時間をこの学園で過ごすことになるし、授業中には指名されることだってあるだろう。そのとき名前がないというのは非常によくはない。よろしくないが、しかしだからといって、こんなところで名前を公開するつもりなんて毛頭ない。だから、偽名を使うことにした。したが、一つ問題があるのを見落としていた。それは、偽名を覚えなければならないということだ。なんだそれくらい、などと他人は言うだろう。しかし、ぼくの場合は話が別だ。なんといっても、毎日のように顔を合わせていたはずのクラスメイトの名前はおろか、存在そのものさえも、ものの見事に忘却しきった経験すらあるのだから。いまさら新しい名前を与えられたところで、到底覚えられるはずがない。

さて、ここまで言えば、いかに察しの悪い人物でも気付くだろう。そう、ご察しの通り、ぼくは自身の偽名を忘れてしまっていた。だからこそ困っているのだった。

けれどもまあ、解決するのは簡単だ。気は進まないが。しかし、そんなことを言っている暇があるのなら、すぐにでもやった方がいいのだろう。時間は有限だ。ぼくなんかのために、いつまでも無為に使わせるのは申し訳ない。まあ、戯言だけだね。

さて……、それでは。

と、自分自身を鼓舞するように心の中だけで言っ、て、ぼくは、ぼくの持つ数少ない荷物の中から、生徒手帳を取り出す。

そして、開いて名前を確認する。

この、生徒手帳というものは、どうやら身分証明書の役割を兼ねているらしく、名前や年齢、住所などが記載されている。記憶力の悪いぼくとしては、とても助かる訳で……。

それじゃあ、気を取り直して、

「みきわめとしき
汀目俊希です。 よろしくお願いします」
と、自己紹介した。

したときに、「まさか、自分の名前を確認したのか!？」みたいな声があがったりもした。

大いに同感だった。ぼくだって、自己紹介のときに自分の名前をいちいち確認するような人と会ったら、多かれ少なかれ驚くことだろう。

ただ、非常に残念なことに、それはぼくのことだった。

第二話

「それでは皆さん、仲良くしてあげてくださいね」

と、先生がぼくの自己紹介の後に続いて言う。

決してそんなことはないと思うし、実際、ぼくのためを思っ言
ってくれているのだと思うが、その言い方だとまるで、ぼくと仲良
くなることを強制してるようにもとれると思う。

放っておいたら友達ができない、なんて風に思われたのかも知れ
ない。

.....。

その可能性は否定出来なかった。むしろ、大いにあり得てしまう
可能性だろう。

少し悲しかった。

閑話休題。

「汀目君はあそこに座ってください」

そう言って、先生は一つの席？を指差す。

今更だが、ぼくが今いる教室は2ーFと呼ばれる教室で、厳しい
クラス分け、そのなかの最下層にあたる教室だ。そして、この学園
ではクラスのランクに応じて、設備に格差をつけている。最上位の
Aクラスの設備は、システムデスクに個人用のエアコンや冷蔵庫な
ど、少々行き過ぎたくらいであるらしい。トップがそれだけ極端な
のだから、ボトムに関しても同じくらい極端であつても不思議はな
い。実際、このFクラスの設備には机や椅子すら無く、敷き詰めら
れた古い畳の上に卓袱台と座布団があるだけだ。おまけに、壁はひ
び割れと落書きだらけで、教室の隅は蜘蛛の巣さえもあつたりする。
だからこそ、ぼくは席の後に疑問符を付けざるを得なかったのだ。

どうでもいいことだけださ。

先生は話を続ける。

「前の席にはクラス代表の坂本君がいるので、わからないことなどは彼に聞いてください」

話が終わったようなので、指定された席に着く。

前の席の坂本君は背が高く、身長は180センチ強くらいあるんじゃないだろうか。細身ではあるが、しっかりと鍛えられているようだ。意志の強そうな目と野性味のある顔をしていて、短い髪はツンツンと立って、たてがみみたいだった。

なんというか、ぼくとは正反対な感じの容姿だ。

「坂本雄二さかもとゆうじだ。よろしく頼む」

雄二君はそう言って手を差し出す。

「よろしく」

ぼくも返事をして手を握り、握手をする。

なんだが、本当に久しぶりに、こういう普通のやり取りを初対面の人とした気がする。

少し感動。

「あつ！ 僕は吉井明久よしあきひさ。よろしくね」

すると、雄二君の横に座っていた子も話しかけてきた。

吉井明久、と言っらしい。

背丈は雄二君よりは低いけど、平均かそれより少し上くらいだろうか。目はパツチリしていて、顔の線も細い。髪は長すぎず、程よく長いと言ったところだろう。けっこう整った顔立ちだ。

「よろしく」

簡潔に返す。

「うん」

たった一言の返事だったけど、明久君は嬉しそうに頷いてくれた。所謂、いい子、という分類に分けられるタイプの人間なんだろうと

思う。

そうこうしているうちに、どうやら自己紹介が始まりそうだった。別に期待はしていないけど、頑張ればくの記憶力、なんて思ってみたりして。

第二話（後書き）

こんにちは

今回はいつもより（とは言ってもまだ第二話だから、いつもと言え
る程回数は重ねてないけど）短くてすいません
キリがいいようにしようした結果です
次の投稿で姫路さんを出せたらいいなあ……

第三話（前書き）

一言だけ、
ごめんなさい
短いです

第三話

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしく願います」

と、寝癖をつけたままでヨレヨレのシャツを貧相ととれるような体に着た、言い方は悪いが、いかにも冴えないという印象がしないこともない感じの成人男性、さらに言及すると、世間一般では中年と呼ばれるような歳との男性が言った。

話の内容からも分かることだが、彼がこのFクラスの担任の先生だ。

その先生は自分の名前を黒板に書こうとしたのか、黒板の方を向いたが、少しキョロキョロとすると、ハツとした様子をしたのちにこちら側へと向き直る。

おおかた、名前を書こうチョークを探すうちに、そもそもチョークが用意されてなかったことを思い出した、といったところだろうか。

ふと、教室に入るときのことを思い出す。

なるほど。あれはこういう意味だったのか。ということは、下手をしていたらばくもあんな風になっていたかも知れない。

それは、ゾツとはしないまでも、多少なりはうんざりするような想像だった。

話は続く。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば申し出て下さい」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」
さっそく誰かが不備を申し出たらしい。

「あー、はい。我慢してください」

おい……！

それじゃあ、申し出る意味が無いじゃねえか……。

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

続々と出てくる申し出。

そのどれもが碌ろくな対応をしてもらえずに撃沈していく。

容赦がなかった。

しかし、この設備は学校、いや、学術機関としてどうなんだろう
か、と些いさか思わざるを得ない。

ぼくはこれまで、20年間とちよつとという時間（今は高校2年生を名乗っているが）を曲がりなりに生きてきた。

当然、こういった学術機関と呼ばれるような施設や機関、組織とは多少なりは関わる機会があったし、実際に関わってもきた。

まあ、関わった5つのうち、2つは口が裂けてもまともだなんて言えないようなものだったけれど。

しかしそれでも、こと設備に関してのみ言うならば、ここはその5つのどれよりも劣悪だろう。

寺子屋か、ここは。

そして、極めつけがこの言葉だ。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

最高だ、この学校。

そして、かつて住んでいた骨董アパートが、寺子屋と表現したこ
こよりも数割増しでボロかったという事実が、ぼくを何とも言えな
い気分にした。

ああ、みいこさん元気かなあ……。

第三話（後書き）

前回、次で姫路さんを出すとか言っておきながら出せませんでした。腑甲斐ないです。

しかも、更新さえも遅くて……。

でも、まだ頑張っというと思ってます。

生暖かい目で見守っていただけたら幸いです。

第四話

「では、自己紹介でも始めましょうか。　そうですね。　廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名を受けて、廊下側の生徒のひとりが立ち上がって名前を告げる。

きのしたひでよし
「木下秀吉じゃ。　演劇部に所属しておる」

と、その生徒は言う。

その生徒は少女だった。

美少女と言って差し支えない少女だった。

そして、驚くべきことに、

男装家だった。

男装家。

まあ、それはいい。

世の中にはそういう人達が居る、ということは世間知らずのぼくだって知っているし、それについてとやかく言うほど、ぼくは世話好きではない。

ただ、ここは学校だ。

先生たちに注意されたりはしないのだろうか。

そのあたり、少し気になったりしないことも無いのだけれど、実際のところはどうかだろうか。

閑話休題

話を戻して、容姿や特徴をまとめるとしよう。

まずは容姿。

体格は小柄で、肩にかかるくらいの長さの髪を緩く縛ゆるくしばってっている。

顔も整っていて可愛らしい。
そして、特徴的な言葉遣い。
キャラがたっている。
そんな第一印象だった。

「と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」
そう言って、微笑^{ほほえむ}む秀吉ちゃん。
どうやら、どうでもいいことを考えているうちに自己紹介が終わ
ってしまったみたいだ。

「……………土屋康太^{つちやこうた}」
次の人は男の子だった。

体格は小柄だが引き締まっていて、運動神経も良さそうだけど、
無口で大人しい印象。
ぼくの周りでは珍しいタイプだ。

「島田美波^{しまだみなみ}です。海外育ちで、日本語は会話ができるけど読み書
きが苦手です」
次は女の子。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は
」

「吉井明久を殴ることです」

随分^{ずいぶん}とピンポイントな趣味を持っているいるようだ。しかも、
暴力的。

「はろはろー」
けれど、そう言ってこちらに、正確には明久君に向かって笑顔で
手を振る彼女は楽しそうだった。

「……あう。　し、島田さん」

対照的に、明久君は少し青ざめているけど……。

「吉井、今年もよろしくね」

趣味からも分かるが、明久君と知り合いらしい。

そんな彼女についての確認。

小柄。　気の強そうな目。　ポニーテール。

美波ちゃんの自己紹介が終わってからは、名前を言うだけの単調な自己紹介が続く。

こう言っでは失礼だが、美波ちゃん以降の自己紹介は余りにも単調すぎて、まったく記憶されなかった。

「　です。　よろしく」

そうして、明久君の前の席の人の自己紹介も終わった。

次の人である明久君が立ち上がり言う。

「　コホン。　えーっと、吉井明久です。　気軽に『ダーリン』
って呼んで下さいね　」

『ダアアーリーーン！！』

野太い声での合唱。

正直言っで気持ち悪かった。

「　失礼。　忘れて下さい。　とにかくよろしくお願い致します」

現に、そう言っで席に着く明久君の顔色も悪い。

自業自得とはいえ、少しだけ同情してしまう。

若干、気分を害することもあったが、明久君の自己紹介も滞りなく終わり、先程までと同じ、単調な自己紹介が続いていくが、そのとき。

この教室に向かって走ってくる足音を聞いた。

そして、教室のドアに視線を向けたとき、ガラリと音を立てて、ドアが開いた。

そこにいたのは、息を切らせて、胸に手を当てている女の子だった。

第四話（後書き）

こんにちは

やっと姫路さんを出せました。

まあ、出せたと言えるかは微妙な気もしますが。

それと、前回書き忘れてましたが、感想にて御指摘あつた世界観についてです。

世界観ですが、

ほとんど戯言メインです。

戯言の四つの世界のうち、表の世界の中に文月学園がある感じです。

なんのひねりもない感じですが、シンプルでいいかなと思います。

それでは、これからもよろしく願いします。

第五話

「あの、遅れて、すいま、せん……」
少女は言う。

息が切れているためだろうが、その言葉は途切れ途切れだった。
それに対して、

「えっ？」

と、教室全体からいかにも驚いたというような声が上がった。
今の台詞になにかおかしな点があっただろうか、いや、ない。

……………反語法にしてみた。

彼女が来て、にわかに騒がしくなっていく教室。

平然としている人はほとんどいないが、それでも、やはりという
べきか、平然としている人も少ないがいた。

その、数少ない人物の一人である福原先生が声を掛ける。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さ
んもお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希みずきといいます。 よろしくお願いま
す……」

彼女は瑞希ちゃんというらしい。

小柄な体に白い肌、そして、背中まで届く長くて柔らかそうな髪。
先程、ただの自己紹介にも関わらず体を縮こちぢまらせて声を上げて
いたこととも相あいまって、小動物のようだと思った。

そして、はじめの台詞と同様に、その容姿にもおかしな点はな
かった。

にもかかわらず、

「はいっ！ 質問です！」

と、これまで一度もなかった（仮にも転入生であり、おそらく、
この場で最も質問を受けることに違和感が無いであろう立場に居る

ぼくにもなかった) 質問という行為の矛先は彼女に向いた。

「あ、は、はいっ。 なんですか？」

突然の質問に驚く瑞希ちゃん。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

失礼にも程がある。

つまり、質問した彼はこう言いたいのだろう。 あなたは自分

たち以下だ、学年最低学力のクラスにさえ相応ふさわしくない学力しか持つていないはずだ。と。

いくらなんでもそんな風に言うことはないんじゃないかな
なんてことをこのぼくですら思ってしまうような言い草だ。いごくや

正直、ただの普通で一般的な女子生徒でしかない瑞希ちゃんには
つらい言葉だろう。

「そ、その……」

事実、瑞希ちゃんは緊張し、己にかけられた心無い言葉に身体を
硬くさせ、しかしそれでも、自身への質問(質問を装よそおった非難)に
対して、健気けなげに答えようとしていた。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」
言い訳。

それが彼女の答えのようだ。

しかし、失敗と言わざるを得ない。

その答えでは、彼からの非難に対しての対応としては不十分だ。
不十分のはずなのに。 クラスの皆は『ああ、なるほど』

とうなずき、納得していた。

瑞希ちゃんの答えを聞き、クラス中でテストについての言い訳じ
みた声上がる中、独り納得のいかないぼくは雄二君に説明を求め
た。

「ねえ、雄二君。 ひとつ聞かせてもらえるかな？」

「ん？ 汀目か。 一体どうしたんだ？」

「彼女、瑞希ちゃんへの質問のことだけど、結局どういうことなの

「がよく分からなくてさ」

「ああ、そうか。お前は姫路のことを知らないんだったな」
そういつて、事の顛末てんまつについて説明してくれる雄二君。

説明後。

「どうやらぼくは勘違いかんちがをしていたようだ。」

質問をした彼は、純粹に、学力が高いはずの瑞希ちゃんがFクラスであることを不思議に思っただけであつて、ぼくが考えたような意図はなかったらしい。

また、ぼくが言い訳だと思つた答えは眞実の事實であるということとも分かつた。

簡単に言えば、ただのぼくの早とちりなのだが、ぼくの捻ひねくれ者さ加減や性格の悪さを表したような気がして、ほんの少しだけ後味が悪かつた。

第六話

そして、

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

瑞希ちゃん は 自己紹介を終わらせて、逃げるようにして明久君と雄二君の隣にあつた空あいている席に着いた。

「き、緊張しました……」

そう言つて、安心したかのように卓袱台つつばずに突つ伏す彼女は、ひよつとするまでも無く、恥ずかしがり屋か気の弱い子なんだと思う。

「あのさ、姫」

「姫路」

瑞希ちゃんに声をかけようとするものの、雄二君によつて見事に邪魔をされた明久君は、一瞬だけ、絶望したような表情になったが、それはぼくには関係の無いことだ。

御愁傷様。
ごしゅうしょうさま

「は、はいつ。 なんですか？ えーつと……」

そんな明久君の様子に気づくことも無く、雄二君に向き直つて、スカートすその裾を直す瑞希ちゃん。

時として、無知とは残酷なものなのかも知れない。

そんな戯言めいたことを考えている間にも、話は進む。

「坂本だ。 坂本雄二。 よろしく頼む」

「あ、姫路です。 よろしく願ひします」

きちんと頭を下げる彼女は礼儀正しかった。

「ところで、姫路の体調は未だいまに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

ようやく会話に参加できた明久君。

よかったね。 そう思わないことも無いが、口に出すことは無い。だからというわけではないけれど、彼女が、

「よ、吉井君!？」

と言つて、あからさまに驚き、

「姫路。明久がブサイクですまん」

と、雄二君が止めを刺したのを聞いたとき、ぼくは明久君への同情を禁じえなかった。

けれど、話は続く。

「そ、そんな! 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ! その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え? それは誰」

「そ、それって誰ですかっ!？」 ついさっき、ようやく会話に参加できたはずの明久君だが、実際はほとんど喋らせて貰えていなかった。

それでも、そもそも参加すらしようとしないぼくよりはまだマシなのかもしれない。

話は、続く。

「確か、久保」

名字を言ったところで、意味ありげに言葉を区切る雄二君。

そして。

「利光だったかな」

と、言い放った。

久保利光。

ぼくはその人物を知らないし、ぼくの周りには少々どこるか大分変わった名前の人がかなりいるけれど、それでも、その、久保利光なる人物の性別が男であるということは、一目瞭然だった。

この場合、「目」というよりは「耳」だったけど。

でも、そんなことは別にどっちだって良かった。

今、この場で大事なものは、久保利光が男であるという事実が、明久君の心を深く深く抉^{えく}ったということだろう。

明久君、御愁傷様。

君の悲劇をぼくは忘れないよ。

ホント、戯言だけどさ。

「……………」

「おい、明久。声を殺してさめざめと泣くな」

このやり取りだけで、いったいどれほどのダメージを明久君が受けたのが窺^{うかが}える。

こついうことは、他人事だからこそ言えるのだろうけれど、それでも、少しでもかわいそうだった。

「半分冗談^{じょうだん}だ。安心しろ」

雄二君、それはフォローになっていない。

「え？ 残りの半分は？」

だからこそ、明久君の疑問は当然ともいえた。

この疑問を、雄二君はどうやってかわすんだろうか。

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？
なるほど。」

話を戻すのか。

ぼくにしては珍しく、素直に感心した。

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

疑問に対して全くとりあわない雄二君に対して、大きな声を出す明久君。

まあ、自分について疑問だし、やはり当然であるとも言える行動だが、タイミング、というか状況が悪かった。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

パンパン、と。

先生が、教卓を叩いて注意した。

「あ、すいませ」

明久君が謝る。

謝り終えるその前に。

バキィッ バラバラバラ……

いきなり、突如として、誰も予想だにしないタイミングで。

先生の、クラスメイトの、そして、ぼくの前で。

教卓は、廃棄物へと姿を変えた。

第七話（前書き）

ごめんなさい
更新遅れました

第七話

.....。

瞬間、教室中に沈黙が起こる。

なんだ、なにが起きている？

この状況は、いったい.....。

まさか、有り得ないとは思っけれど、あのいかにも冴^さえない中年のオッサンが、あの哀川さんや出夢くんに匹敵するだけの力を、暴力を保有しているとでも言うのか。

有り得ない。

一般的にも常識的にも有り得ない。

そんなこと、考えるまでもなく分かりきったことじゃないか。

けれど、一般的だとか常識的だなんて、そんな考えが、そんな判断が、そんな決断が、まるで役に立たない人達や現象、そして世界があることを　　ぼくは知ってしまったている。

知りすぎて、しまっていた。

.....だから、わからない。

なにが起きたのかも、なにが起きているのかも、これから、なにが起こるのかも.....。

ぼくは、また、戻って来てしまったのか.....。

やはり、ぼくが今更「普通」に混ざることなんて　　。

結論　　というか、オチ。

勘違い、だった。

いや、考え過ぎだった、と言っべきだろうか。

けど、まあ、そういうこと。

福原先生は見かけ通りの、ただの一般人で、見かけ通りの力しか

持っていない。

だから、教卓が壊れたのは、それ自体がとんでもなくボロかったからだそうだ。

そのことは雄二君が教えてくれて、保証までしてくれた。

流石さすがのぼくも、その言葉を疑うことはなかった。

疑う理由がなかった　というのもあるが、それ以上に、哀川さんや出夢くんクラスの暴力を持った人間がこの表の世界にもいる、という可能性を考えなくなかったというのが大きかった。

閑話休題。

あの後、福原先生は気まずそうに替えの教卓と取りに行った。

そして、彼が教室を出て行つてすぐにぼくは雄二君に話し掛けて、あのことを聞き、保証してもらったという訳だ。

今更だが、いくら突然のことに混乱してしまったとはいえ、あれほどまでに荒唐無稽こうとうむけいなことを本気で考えていたという事実は、一時的にでも、ぼくを落ち込ませるには十分だった。

だから、というわけではないが、ぼくとの話の後に、教室を出て行く雄二君と明久君について、ぼくはなにも思わず、なにもしなかった。

その後、特になにをするでもなくぼうつとしていたら、しばらくしたところで二人が戻り、そのまたすぐ後に、先生も替えの教卓を持って戻つて来た。

教卓は相も変わらずボロいままだったが……。

そして、

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

気を取り直して続きが再開される。

「えー、須川亮すがわりようです。趣味は」

それから、またも同じように単調な自己紹介が続いた。
で、ようやく。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

最後の一人まで終わった。

大した時間は掛かってないはずなのに、途中だとかにいろいろあったためになん다가長く感じた。

まあ、それはともかく、今は雄二君に意識を向けよう。

立ち上がり、教壇へとゆつくりと歩いていく雄二君。
不思議と貫禄かんろくのようなものさえあるように見えた。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生にそう問われた雄二君は鷹揚おうように頷く。

自信に満ち溢あふれたその態度は、どこか　あの赤色を思い起こさせた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

彼はそう言つて、さらに続けた。

「さて、皆に一つ聞きたい」

ゆつくりと、一人ひとりの目を見るようにして告げる。

間の取り方が　上手い。

これは、自然と注目させられる。

その証拠に、クラスメートの視線は雄二君に集中している。
そんな皆を見渡したのち、教室内の各所に視線を向ける。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられるように皆は雄二君の視線を追う。
けれど、ぼくは雄二君から目を離さない。彼は、なにをしよう
というのだろうか。

ぼくは 雄二君の意図を掴めずにいた。
そして。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が」

彼は話し始め、一呼吸おいて、静かに続ける。

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

一部を除いた、二年F組の生徒全員が叫んだ。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。 代表として問題
意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ! 改善
を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ? あまりに差が大きすぎ
る!』

次々と出てくる不平不満の声。

こういった声とかを報告すればいいのだろうか?

まあ、そういうのは後回しだ。

今はことの顛末を見届ける方が大事だ。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

皆の反応が予想通りだったのか、自信に満ちた不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

野性味のある八重歯やえはを見せて、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
雄二君は、戦争の引き金を引いた。

結局、ぼくの人生に平穩の二文字はないのかも知れない。
全く因果な人生だよな、人間失格

第七話（後書き）

前書きでも書きましたが、
更新遅れて本当にすいませんでした。

言い訳に過ぎませんが、

春休みの宿題や

新しいクラスへの対応などで

ゴタゴタしていたため余裕がなかったんです。

今後も頑張っていこうと思ってますので、
よろしく願いします。

第八話（前書き）

非常に遅れてしまいました
すいません

第八話

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよう思う」

雄二君は、そう言った。

誰かに宣誓するかのように、そう言いきった。

その後、訪れる沈黙。

しかし、それも長くは続かず、数瞬後には

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいららない』

なんて声がクラス中から上がる。

けれど、そんなことよりも　そもそも試験召喚戦争っての

は一体なんなんだ？

「そんなことはない。　必ず勝てる。　いや、俺が勝たせてみせる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

嗚呼、^{ああ}ぼくを置き去りにして、どんどんと話が進んでいく……。

この流れは不味い。^{まず}

なのに、話の中身がまるで解らないから　どうすればいいのか
判^{わか}らない。

けれど、そんなぼく的心情などお構いなしで、物語は進む。

「根拠ならあるさ。　このクラスには試験召喚戦争で勝つことので
きる要素が揃^{そろ}っている」

その言葉でざわめくクラス。

「それを今から説明してやる」

そう言つて不敵な笑みを浮かべる雄二君からは、正直嫌な予感しかしない。

「おい、康太。　畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

雄二君の視線の先を見ると、

康太、と名前を呼ばれた生徒が、懸命けんめいに否定のポーズを取っていた。

けどそれも、無駄な努力となるだろう。

あそこまでハッキリと畳の跡がついていたら、ねえ……。

「土屋康太。　こいつがあ有名な、寡黙なる性識者へムツツリーニ」だ」

「……………！！（ブンブン）」

あ、顔と手の動きが加速した。

諦めて認めてしまえば楽になれるのに。

どうしてそんなに必死になれるんだろうか……？

何のために必死になるのだろうか……？

ばくも、いつかは、あんな風に必死になつて　一生懸命になつて生きられるようになるのだろうか？

だとしたら　。

おっと、それは　今は関係のないことだった。

話を戻さないと。

「ムツツリーニだと……？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？」

「だが見ろ。　あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……………」

「ああ。　ムツツリの名に恥じない姿だ……………」

意識を内側から外側へ戻すと、クラスの男子のほとんどが畏敬いけいの念を康太君に向けていた。

この状況は一体なんなんだ。

全員がこうなのか？　と思い、少し辺りを見ると、疑問顔の瑞希ちゃんがいた。

良かった、少ないとはいえ、一応の仲間（？）はいるようだ。

てゆうか、クラスの全員があんな風だったら、いくらこのぼくでも辟易へきえきしてしまうだろうと思う。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。　皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？　わ、私ですかっ？」

「ああ。　ウチの主戦力だ。　期待している」

話が、康太君についてから瑞希ちゃんについてへと変わっていった。

「そつだ。　俺達には姫路さんがいるんだった」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。　彼女さえいれば何もいらなないな」

あ、なんとなくだけど、話の意味するところが分かってきたかも知れない。

「木下秀吉だっている」

あれ？

少し予想外の名前があがったけど……。

「おお……！」

「ああ。　アイツ確か、木下優子ゆうこの……」

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよなー』
どんと教室中が活気付いていく。
が、

「それに、吉井明久だっている」

……シン

一瞬にして冷めた。

さながら、裏返したかのようだった。

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！ 折角上がりかけてた士氣に翳^{かげ}りが見えてるし！ 僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを って、なんで僕を睨^{にら}むの？ 士氣が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

独りで騒いでいる明久君には、皆からの冷めた視線が向けられていた。

「そうか。 知らないようなら教えてやる。 こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

へえ、肩書きがあるなんて、明久君は意外と凄い子なのかもしれない。

肩書きを持つ男子高校生。

ちよつとした記念物になるんじゃないだろうか。

そこに、

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

どうやら明久君はマイナス方向のベクトルで、凄い子だったらしい。

ちよつと納得。

「ち、違つよつ！　ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で

」

「そつだ。　バカの代名詞だ」

「　肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどういうもののんですか？」

「具体的には教師の雑用係だな。　力仕事とかそういった類たぐいの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

なるほど、特例ということは、一般的な、試験召喚獣と呼ばれる何かしらは物には触れることができないらしい。

そもそもの試験召喚獣がなんなのか知らないばかりには　少なくとも今現在は　役に立たない情報だけれど、それでも無いよりはマシだろう。

「そつなんですか？　それって凄いですね。　試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

瑞希ちゃんは本当に感心したようにそう言うが、

「あはは。　そんな大したもんじゃないんだよ」

軽く手を振りながら否定する明久君の表情は、少し曇っていた。
ふーん。

あの様子からすると、別にそこまで凄い能力と言うわけではないみたいだ。

その証拠に、

『おいおい。　《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。　それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

なんて声まで上がり始めた。

ていうか、大したことないどころの話じゃないし……。

ここまでくると最早もはや、ただの不良品でしかないだろ。

「気にするな。 どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」
まあ、それなら問題ないかな？

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」
「うるさいぞ、明久。 みんな、確かにウチのクラスには明久のよう
うな、ゴミ以下の戦力にしかないクズもいる」

流石にそれは言い過ぎじゃないかな、雄二君。

「しかし、それを補ってなお戦力と成りうるであろう転校生が、ウ
チのクラスにはいる。 お前のことだぞ、汀目」

そんなの聞いてないんだけど……。

ああ、さっきの嫌な予感 名前を呼ばれるまで忘れていたけど
はこのことだったのかも知れない。

最近是比较的平和だったから油断していた。
また巻き込まれてしまった。

物語の中心に立つのは、傍観者の役割じゃないと言っのに。

「あの転校生か！ 確かに只者ただものじゃなさそうなヤツではあったな！」

「なんか大人びていたしな！」

再び教室中が盛り上がりですが、

「けどアイツ、自分の名前を忘れてたぞ？」

その何気ない一言によって再び静かになった。

ざわ…

ざわ…

と、クラスメートたちが微かに話す声だけが聞こえる。

「普通、自分の名前を忘れるか？」

「どう考えてもありえないよな」

「本当に大丈夫なのか？」

なんて声があちこちからあがる。

だから期待されたりするのが嫌だったのに。

「ま、まあ、大丈夫だろ。 汀目は寝ぼけていたんだ、きつと」

士気が下がる皆へ、雄二君がフォローする。

正直、全然フォローにはなっていないけど……。

「と、とにかくだ。 俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

少し焦ったように、雄二君は言う。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「当然だ！！」

「ならば全員筆（ペン）を一執れ！ 出陣の準備だ！」

「おおーっ！！！」

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

「うおおーっ！！！」

「お、おー……」

意外なことに、大人しそうな瑞希ちゃんも、控えめにはあるが拳（こぶし）を一揚げていた。

ぼくは揚げていないが、クラスのみんなは拳を揚げて、一体感にあふれていた。

続けて雄二君が、

「明久にDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。 無事大役を果たせ！」

と、指示を出した。

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷（ひど）い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。 やつらがお前に危害を加えることはない。 騙されたいと思っ行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。 俺を誰だと思っている」

妙に自信あり気に雄二君は言う。

そして。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙だますような真似はしない」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

明久君が折れた。

いいように丸め込まれていた。

が、気づいた様子もなく、やけに堂々と教室を出て行く。
ひよっとするまでもなく、その姿は滑稽こっけいだった。

第八話（後書き）

お久しぶりになります

およそ2ヶ月も間を空けてしまい、申し訳ありません
これからも、このようなことが有るかと思いますが、
応援して頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5558q/>

バカとテストと欠陥製品

2011年6月10日01時10分発行